

(む望を面方川石・川賀須)部心核の町新野小

地

球

小野新町に就いて

第十五卷

第六號

四三

五〇

(地方的小核心聚落の研究 一)

山口彌一郎

緒言

小野<sup>ヲノ</sup>新町は福島縣田村郡にある人口約四、〇〇〇の單なる地方的一小核心聚落到過ぎない。然し平町と郡山市の略々中間(平町より四十二キロ、郡山市より三十九キロ)位置にあり、阿武隈山地の主要なる横斷交通路に沿ひ、磐越東線開通以前には平、郡山の中間驛站の最適地として相當古くから核心的性質を帯びたものゝ如くである。

筆者は阿武隈山地の未だ復活による浸蝕の達せざる小起伏地形の間を縫ふて集る主要四交通路が、その交點に聚落を發生せしめて、如何なる状態で進展するかの研究に興味をもち、調査に手頃なるを思ひ、數回踏査を試みた。本篇はその中の核心的調査の一、二に就いて述べたも

のである。

### 附近の地形

第三圖に示すが如く、阿武隈山地の略々中央を西北西より東南東に斜斷する夏井川構造線による夏井川の傾斜は數個所にて變換してゐる。五味澤附近の急傾斜點を越すと夏井附近より地貌が一變し、起伏は緩に、谷底には若返らざる沖積の平地が存在する。谷底の海拔高度約四三〇米が水田化された耕作地で、小起伏山地の麓斜面が畑地として開拓されつゝある。

附近の高度分布を總合するに、四〇〇米より五〇〇米に及ぶ可耕地域とも見做される耕地及び居住區域を含む地帯と、五〇〇米より六〇〇米に及ぶ準平原遺跡とも察しられる山地帯とに大別し得る。六〇〇米以上の山地は面積的には比較的少なく、モナドノツクと思はれる八〇〇乃至一〇〇〇米の高峯を戴く地域が主要なものである。

附近の地形を決定する主要なものは、殆んど

小野新町に就いて

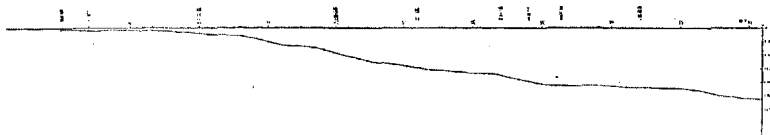
準平原化された地形の復活的隆起と、夏井川構造線とであらう。小野新町は夏井川構造線を辿つた主要交通路に沿ふて發達したものであり、復活後の急に若返つた夏井川の浸蝕の尖端を五味澤附近の急流區域とみれば、それより上流には未だ若返らざる谷底平地が夏井川構造線に沿ふて最も多く發達してゐる。尙ほ小野新町附近の地形は稍盆地狀をなしてゐ、主要構造線に沿ふもの、他にも數條の放射狀に發達した谷底平地を認める事が出来る。此等が交通路の誘導をする事は勿論である。

氣候的制約は今回は深く追求せずに終つた。西北風が十二月より三月迄卓越し、相當の降雪もあり、四、五〇〇米の高地としての影響もあるであらうが、それ等の研究は他の機會にゆづる外ない。

### 小野新町の核的位置

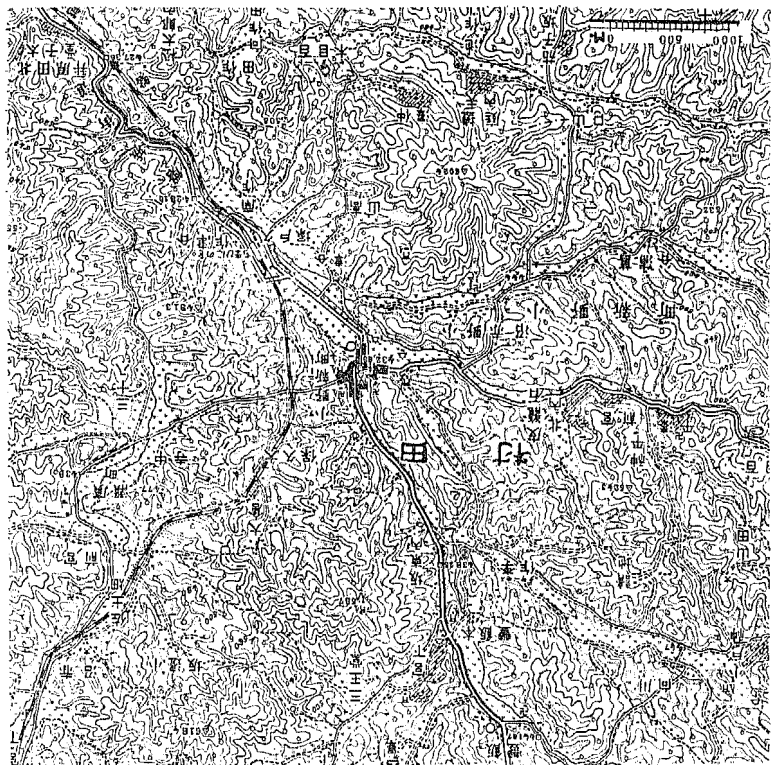
(一) 農村の核心聚落はその農村の生産地域を遠心力の圏内とみてほゞその中心地點に發達するのを常態とする。而して地形、氣候等の自然的因

圖斜傾川非夏



圖三第

町新野小



圖二第

二五

圖

第六卷

第五十七卷

地球

地

子や、人文地理學的綜合結果がその最後の機微を決定するものであらう。而して核心的勢力の及ぶ限界の研究は地理區決定の要因であると共に、最も興味ある問題であらう。

筆者は核心聚落の都市的勢力がほゞその限界を決定するものなるを思ひ、その核心聚落の農業人口、水産人口、鑛業人口を除く他の人口を都市的人口と認め、兩核心聚落間の距離をそれ等の聚落の都市的人口にて按分して圖上に於ける核心的勢力範圍を定める基準とする事を試みた。即ち次の數式に於てPは兩核心聚落間の距離、a、bは夫々その聚落の都市的人口、A、Bは核心的勢力の及ぶ限界距離

$$\frac{Pa}{a+b} = A \quad \frac{Pb}{a+b} = B$$

然しこの方法には地形の影響が大である事及び、徒歩にての一日の往復行程、都市の大きさにある限定を與へねばならぬ事を知つた。例へば全國的核心聚落と單なる地方的核心聚落との間に於ては、小核心聚落は大核心聚落に包含さ

れて按分の比例が意味をなさなくなる。ほゞ特色の相似だ、大きさの餘り異なる核心聚落間に於ては相當な確實性があると思はれる。この方法を小野新町に適用するに當つて地形が強く影響するなきかと、郡山の最近の勃興が如何に反映するかを恐れた。方法そのもの、吟味をするに先立つて實地のフィールドに試みたるは筆者の本意としない處であるが、漸次研究を進めんと思ひ先づ先輩の御教示を仰ぐ事にした。

先づ小野新町が平、郡山間の如何なる地點にあるかを確める爲めに先述の方法を試みた。統計は大正九年のを用ひた。平町人口二〇、一七五、内農、水、鑛人口一四、一八、都市的人口一八、七五七、郡山市(當時は町)人口二六、二一八、内農、水、鑛人口二、五四二、都市的人口二三、六七六、平、郡山の距離八一・五キロ按分して算出したる限界距離平より三六・〇二キロ、郡山より四五・四九キロ、然るに小野新町、平間の實距離四二・一六キロ算定の結果よりも實距離に於て六・一三キロ東に偏する事にな

る。事實小野新町は鐵道開通以來中間驛市としての使命は減じ、郡山の太核心下にある一小核心たる立場になつてゐ、平、郡山間の核心的勢力の限界は小野新町の東方六・五キロの位置にある五味澤の若返りの谷の先端になつてゐる。これは地形の影響も考慮に入れねばならないが停車場が小野新町の遙か東方に置かれ、發展の東漸する傾向あるは面白い事實である。

第一表

核心理聚落	大正九、一〇、一、 總人口	農、水、 鑛業人 口	都市的 人口	小野新町 ヨリノ實 距離	算出ニヨル 小野新町勢 力範圍ノ距 離	同上
小野新町	四、九四	一、六〇	二、八四	キロメートル 三・三六	七・六三	風越峠
三春町	七、七七	八二	六、九五	三・三六	一四・四	大越驛
常葉町	四、五三	三、五九	一、九〇	三・七九	四・二〇	田尻
郡山町	二、六三	二、四四	三、七六	五・三六	五・〇五	日向
須賀川町	一四、四〇	二、〇三	一三、三三	一七・二六	一四・五	下蓬田
石川町	五、〇〇	一、九三	三、一七	三〇・四三	一四・五	清水
平町	二〇、一七	一、四八	一八、七七	四二・二六	五・五	

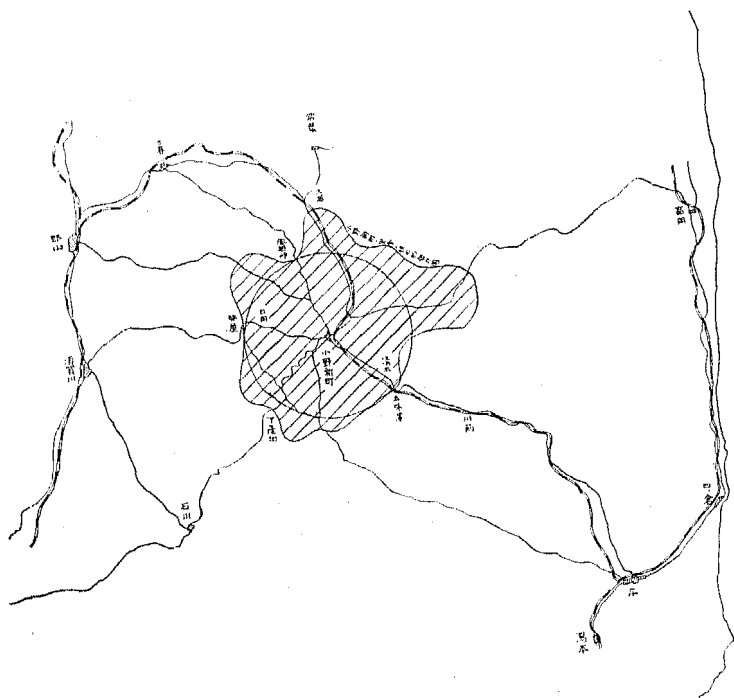
次に小野新町の核心的勢力範圍を算定すれば次の如き結果となる。

前表を先づ第四圖に描けば略々限界は半径七・五キロの圓周附近に來る。算出の距離は不同であるが道路の屈折が不思議な程調をとつてゐる。筆者はこれ等が實際の小野新町を核心とする勢力範圍と如何なる關係にあるかを踏査すべく、中心方面よりは小野新町の米穀商、肥料商等の取引を主として調査し、地方的方面よりは限界附近の農家に就いて、どちらの町に多く出るかを聞き、郡山との限界を除いてはこの算定誤差の意外に少なさを知つた。

三春町との限界は風越峠が地形上よりも習慣上よりもよく一致してゐる。

常葉町とは大越驛附近が實際上の限界らしく、たゞ停車場の發達と、三春町の勢力が及んで

第 四 圖



小野新町の核心的勢力範圍圖

る爲め、むしろ大越附近を漸移帯とみる方可ならむ。

郡山は算定距離を全然用ふる事が出来ず小野新町の勢力は算定距離を越える事七キロ餘で、而かも三春の勢力と直接界してゐる事を知つた。これは前述の如く此の方法が斯の如き場合に用ひる事の不可を證明してゐる。

須賀川町との限界は日向を越える以西一・五キロの娣屋附近らしく、石川町との下蓬田附近は略々實際に近い。

平町とは算定数は清水を示してゐるが、五味澤、山下谷迄は峽谷をなして主要なる聚落なく、實際に於ても此の峽谷が限界である。

此の方法によつてどれだけ核心的勢力範圍を確め得るかは研究の餘地の相當多い事を知るが、小野新町の

小野新町に就いて

場合は土地の傾斜及び耕地、聚落密度の不平均があるにもか、はらず、實際の結果に近い數を示し、小野新町を核心とする範圍は略々半徑七・五キロの圏内である事を知り得た。次ぎにこれ等の反影である小野新町の構成をみよう。

(一)地理學評論 大正十五年九月 佐々木彦一郎  
盆地聚落の機構に就いて

(二)地理學評論 昭和五年九月 佐々木彦一郎  
職業人に構成より見たる地理區分——此の論文よりヒントを得た事であるが地理區を決定する場合とその主旨に於て稍々異なるを思ひ、鑛業人口を都市的人口より除いた。この分配は重要な根本問題なので將來深く研究する積りである。

### 聚落構成

小野新町は平町より郡山市に通ずる主要交通路に石川町、須賀川町方面及び常葉、大越方面よりの交通路が交叉する地點に、單なる驛站と

してか、或は最初より核心的意味の小聚落として發生したものと思はれる。舊藩時代の政治的意味その他の原因は發見出來ない。現在の最も中心地と見做されるは平より郡山に通ずる道路に石川、須賀川方面よりの道路の會する警察署附近で、店舗が比較的大きく、その發達も古く鐵道開通以前の馬宿兼宿屋の驛站の本質的な部分を包含する地帯である。現在警察署を中心として四方に(但し、大越方面への道路は郡山に通ずる道路より分れて稍々中心より東北に偏する)展開する商店の繁華の状態を観察するに、中心を離れて店そのものは小さいが、反つてにぎやかになつてゐるのを知る事が出来る。筆者はその點に興味を持ち、次の如き方法で種々の密度の算出を試みた。

### 第 二 表

小野新町ノ聚落密度表 (中心點警察署前・一區劃100m.)

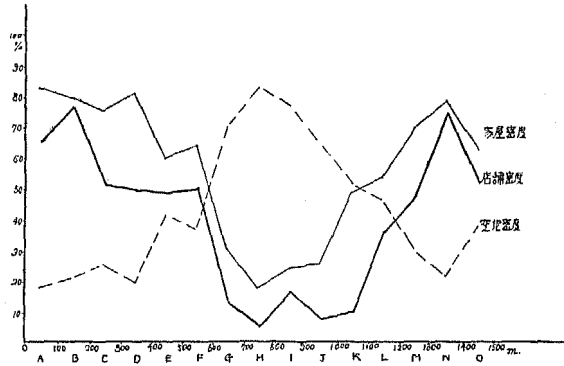
	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M	N	O	
I. 停車場及 平町方面	家屋ノ%	82.2	79.1	75.0	80.4	59.1	63.2	30.4	17.2	23.6	25.4	48.2	53.6	69.9	78.2	62.7
	店舗ノ%	65.9	76.4	51.4	49.1	48.2	49.6	12.8	5.0	16.4	7.8	9.1	35.5	47.5	74.5	51.8
	空地ノ%	17.8	20.9	25.0	19.6	40.9	36.8	69.6	82.8	76.4	74.6	51.8	46.4	30.1	21.8	37.3
II. 石山、須 賀川方面	家屋ノ%	79.5	85.0	67.7	67.2	20.9										
	店舗ノ%	50.3	65.0	58.7	35.5	0										
	空地ノ%	20.5	15.0	32.3	32.8	79.1										
III. 三谷、那 山方面	家屋ノ%	94.5	83.6	79.5	65.9	68.2	67.8	39.1								
	店舗ノ%	81.8	75.0	66.8	55.9	22.8	17.8	3.7								
	空地ノ%	5.5	16.4	20.5	34.1	31.8	32.2	60.9								
IV. 常葉、大 越方面	家屋ノ%	94.5	76.8	67.5												
	店舗ノ%	81.8	55.0	32.8												
	空地ノ%	5.5	23.2	32.5												

先づ中心と見做される警察署前を振り出しに四方に向つて（但し郡山方面と常葉方面は中心點より分岐したと見做して、分岐點までは同じ密度を使用した）家屋、店舗の現在の間口を目標し空地は實測して、方眼紙に書いていつた。

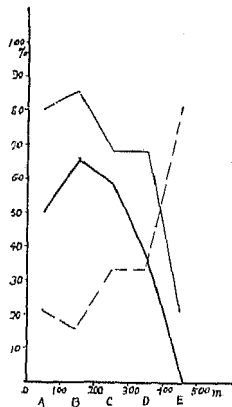
（此等の實測が道路の實距離との誤差は意外に少なかつたのでこのまゝ修正せずに使用した）  
圖上に於ては建築物の單位が間である關係上そのまゝを描いたが、計算には片側五十五間即ち一〇〇米をとり兩側合して二〇〇米を單位とし



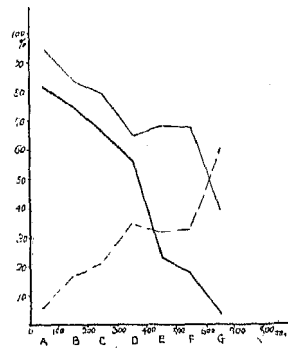
圖 五 第



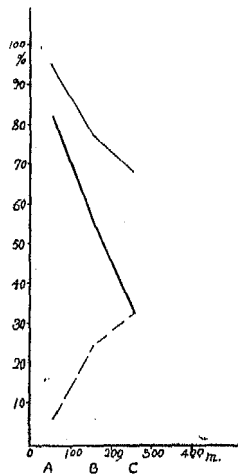
(甲)



(乙)



(丙)



(丁)

家屋、店舗、空地の百分率を算定して第二表を得た。これ等をグラフに描けば第五圖甲、乙、丙、丁となる以下此等のグラフに依つて少しく考察を試みよう。

中心點より平町に向ふ交通路に沿ふ聚落には地形上その東端に停車場の位置を決せられた爲めに、その影響が明瞭に出てゐる。停車場まで約一四〇〇米、その中間に家屋密度及び店舗密

度の低き部分あるは、發達が新らしく、中心點及び停車場前に核心點を置く影響とみられるが踏査の際殊に空屋の多いのが注意された。按ずるに、當小野新町の核心的發展性にある限定があり、現在尙ほ中心點より停車場前迄の全部を満たし得ないであらう。當地の人々が停車場開設當時小野新町そのものの、發展の限界の豫想に誤りがあり、土地の價を無法に騰貴せしめ、或は住宅、店舗を建て過ぎた傾向を示すものではなからうか。それに昨今の經濟界の不況が加味されて斯の如き現象をみたのであらう。中心點がむしろ低く、それより一〇〇米乃至二〇〇米距りたる點の密度の大なるは、石川、須賀川方面にも觀察される現象で、交通路の交點附近に發達した最初の聚落は相當古く、店舗も相當自由に大きく餘裕をもつてゐたではなからうかと思はれる。現在も所謂老舗の大きな商店が多い。而して發展につれ、その周圍に密度の高い地帯が出來、町端に行くに従つて低下してゐる

小野新町に就いて

のをみる。これ等は三春、郡山方面には顯れず、たゞちに最高位を示すが、それは事實に於て中心地點が警察署より西南、石川、須賀川方面及び、平方面に偏してゐる事を示し、總じて中心點には密度低く、その外圓に最も高き地帯があり、漸次遠ざかるに従つて低下するの形式をもつもの、様に觀察される。筆者は古くより交通路の交點附近に發達した核心聚落が、他の鑛業的、或は工業的等の原因が加はらず最後まで單に地方的小核心的意味を持續してゐる時は斯の如き形式を持つ場合のあり得る事を考へる事が出来る。

阿武隈山地に於けるが如く小起伏山地の制約があつて聚落の幅を大にし得ない場合の小核心的聚落たる、三春、石川、常葉等にも斯の如き様式を帯びてゐる様に思ふ。將來それ等にも詳細なる研究を進め得れば面白い結果が得られるものと思はれる。勿論それ等が地方的核心聚落である以上は、その核心的勢力範圍の廣い方向に強く延びるのが常態であり、小野新町が三春

平方面に最も長く延びたのも、停車場の刺戟と共に考へなければならぬ事である。

(一)百分率によつて聚落密度を算定し、グラフに描き資料の純粹化に務める事は、先人の既に試みられた事であらうし、筆者昨秋中部地方盆地聚落の研究旅行を試みた際三澤勝衛氏に案内されて諏訪盆地の聚落見學の途次親しく語られた事にヒントを得た點がある。

### 結論

單に交通路による地方的小核心聚落である小

野新町の平凡なる調査が筆者には種々の暗示を與へた點が少くなかつた。勿論これ等の方法と方法そのもの、吟味と相俟つて、もつと多くの手頃な聚落にフィルドをとつて調査を進めたならば、聚落の核心性なるもの、本質的な研究の一端ともなり得るではなからうか。敢て發表して御教示を仰ぐ次第である。(昭和六年三月下旬)

## 新譯 日本地學論文集 (一三)

### ライマン——日本油田調査第二年報 (九)

金澤から山中 金澤で予等は二日を費して官立博物館に於ける石川縣産の鑛物を注意して検討し、役人の要請に應じて其に名を付けた。今や天氣が甚しく荒れ模様となり、時に予等の進行を遅らせたが鑛物の鑑定に加ふるに内業を行ふの機を得た。金澤に滞在すること四日の後に

予等は南西行し色付陶器で有名な寺井を過ぎて小松に到り、そこから陶窯のある處を経て東方二里の富有にして有利な遊泉寺の黄銅鑛鑛山に行つた(二大鑛脈があつて、其の一は三個の落し直りを有する)、本鑛山は二百年以上稼行され一八七六年には銅約八千五百貫目(七〇、八〇